



(徳田涼佳JS6)

東北地方の山中奥深く

登山者でも寄り付かないような
山間部に隠れるようにその洞穴
はあった

いつそれが始まったのか、もう
記録にも残されていない程昔から
その儀式は続いていた。

巳年、十二年毎に行われるその儀式には
巳年生まれの巫女が必要とされている。

巫女は厳選な調査に基づき、合意の元
その役割を勤める事になっている。

あの…

だれか
いますか…?

だれか…
ほ…

今回も巫女役の少女の協力を無事得れたようだ。

今後の円滑な儀式運営のため、今回は初めて
無人機による撮影記録を試みる事となった。

ズンズン…

● REC

「それ」は洞窟の奥の闇から
ゆっくりと現われた

一見すると人のようにも見えるが
ボロボロを纏った「それ」は、はるか昔から
変わぬ姿だという。

あれ…？

あの…
おれか
いさんですか…

びしっ

なに？

んっ！

じやる

ぢゃ。

「それ」がおもむろに少女の物色をはじめ

今回の少女は無事「それ」に
気に入られたようだった

過去には巫女が選ばれるまでに
十数人が処理された年もあったという

「それ」の股間部から触手状のモノが少女に伸びる
ぬめぬめとした体液に濡れるそれは、人の生殖器では考えられない動き
で少女に迫っていく。

少女の体を確かめるかのように絡みつくそれは
確かに獲物を捕食する蛇のように見えた

ひとしきり少女の身体を確かめると
やがてそれは動きを変えた

古代の人間はコレを見てへ巳の神に見立てたのだろうか？





拒否感を示していた行動が徐々に薄れていき
少女は快感に耐えるように身もだえ始めた

「それ」はが少女を嬲り始めてから暫くすると
少女に変化が起き始めた

恐怖心で理性がマヒしたのか
「それ」の体液から出る成分
に何らかの作用があるのか…

少女はすっかり発情して
いるようだった

「それ」は本来ならまだ成長途中の体に過剰な
刺激を与え強制的に発情を促しているようだった

やがて少女の性器から愛液が染み出し
「それ」の表面を覆う体液とにちやにちやと
音を出して混じり合う音が響くようになると、
それは狙いを定めるように少女の股間に
触手を伸ばした



「それ」は少女に触手を挿入すると、
少女の反応を楽しむようにぬちぬちと
触手を動かし始めた

まだ未成熟なはずの少女の穴は
触手によって押し広げられ、
じゅぼじゅぼとまるで触手を
飲み込んでいるようだった

暗い洞窟に少女の小さな
嬌声と水音が響く

ひとしきり少女の体を
楽しんだのか「それ」は
動きを変えた



「それ」は少女の腰を抱え込み
逃げられないようにすると、少女の
奥に激しく触手を打ち付けた

触手がつきこまれるたびに少女の体が震え
喘ぎ声とも悲鳴とも取れる声が響く中
「それ」は一際大きく少女の中に突き入れた





「それ」が少女に覆いかぶさり
少女はびくびくと跳ねるような
動きをしている

「それ」の精が少女の幼い身体に
大量に注がれているであろうことが
容易に想像できた

「それ」が少女の生殖器から
触手を抜き出すとゴポリと
黄ばんだ液体が零れた

少女の小さい胎内で収まりきらな
かった精液であろうそれを見て、
私はふと巫女 conditions に月経がある事
を思い出していた

少女の胎内に精が送られ
ているのを見届けると、
満足したのが再び少女に
ずぶりと触手を突き立てた

「それ」は少女を抱え込むように
覆いかぶさると激しい抽入を繰り返した

時折動きが止まると少女の
身体から収まりきらない
体液が零れ落ちる



そんな行為が小一時間ほど続いた頃には
少女もすっかり反応が薄くなっていった

少女はぐったりと人形のようになり
洞窟には水音とかすかな呼吸音だけが響いた







儀式の開始から半日が立った
「それ」は飽きることなく少女を
弄んでいた

少女の腹部は異様なほど膨れ
まるで妊娠しているように見えた

ドゥ
ドゥ

ドゥ
ドゥ

ドゥ
ドゥ

ドゥ
ドゥ

それからしばらくすると
「それ」は少女を抱えたまま
洞窟の奥に消えていった

これをもって今回の儀式も
無事完了とする

「それ」は人知を超えた存在だ
もしかしたら本当に少女はもう
身籠っていたのかもしれない

おうら
おうら

お
かえらせえ



実際のところこの儀式がいつから始まり
何故続けているのか、把握しているものはやいない

「儀式をやめると大いなる災いが訪れる」
という警句が残っているだけだ

だがこれからもこの儀式は続いていくのだろう

少女の犠牲が世界を救っていると信じて



おわり